

生きるための学校、学校の中の生活

地域産業

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん



とよこらちょうりつおつしょうがっこう
豊頃町立大津小学校。十勝で最も長い歴史をもつ小学校の一つ。

明治12年(1879)、^{ひろ お おおつ きょういくじょ}広尾と大津に教育所ができ、明治14年(1881)に公立の学校となります(のちの^{ひろ おしょうがっこう}広尾小学校と大津小学校)。

明治16年(1873)、オベリベリ(帯広)に入植した^{せいしや わたなべ ばんせいしや}晩成社の渡辺カネが、^{おびひろ にゅうしよく ばん}晩成社メンバーの子どもやアイヌの子どもを集めて、塾を開いています。

また明治27年(1894)には、寺に子どもを集めて読み書きなどを教える「寺子屋」が、^{てら こや おびひろ しが としべつぶと いけ}帯広市街や利別太(池田町)につくられます。キリスト教の^{せんきょうし}宣教師による塾や学校もありました。(p198)

明治29年(1896)には、^{おしらべつしょう ちゅうがっこう ひろ}のちの音調津小・中学校(広尾町：平成19年閉校)、今の^{おちよう へいこう おびひろしょうがっこう}帯広小学校ができ、明治30年代になって十勝各地に学校が増えています。



明治31年(1898)、^{のむらじきょう いけだ}野村慈教が池田につくった^{せつきょうじょ てらこや}説教所。寺子屋として、池田農場の子どもにも授業をおこなった。

(写真：『池田町懐かしのアルバム』より)

教える側の目的、教わる側の理由

教える側(とくに国)としては、各地方から来た和^わ人、別の文化を持ったアイヌの人に、同じことばや文字を教えることで仕事を伝えやすくして、産業の発展につなげる目的があり、さらに兵隊になった時に命令しやすくする目的もあります。

また、^{ぶつぎょう}仏教や^{せんきょうし}キリスト教などの僧や宣教師が教育をおこなう場合は、^{しゅうきょう}宗教の考え方を広めることも大きな目的です。

教わる方はもっと切実です。文字や計算がわからないことで、^{こさく けいやく}小作の契約をする時やお金を借りる時に、かんちがいしたり、だまされたりすることがよく起きたのです。

こうした苦しみを子どもたちには味あわせたくない、そんな思いが、子どもたちに教育を受けさせようという力になりました。

いそがしい時には仕事が優先

ただ、多くの子どもたちは、学校に通う年になれば、大切な働き手でもありました。

農作物の取り入れなどいそがしい時には、学校は休んで家の仕事をするのがあたりまえでした。貧しくて学校へ通えず、^{さいさい ひとで ぶそく}8歳か9歳で、人手不足の家へ働きに出されることもありました。

また、赤ちゃんや小さい子は、お兄さんやお姉さんがめんどろを見なければなりません。

児童生徒が小さな子をおぶったまま学校で授業を受け、赤ちゃんが泣き出すと、ろうかに出てあやしていることもよくありました。そんな時には、窓から^{じゅぎょう}授業を聞いたものだといえます。



(上)明治41年(1908)に完成した^{とおふつじんじょうしょうがっこう}十弗尋常小学校。

(右)家の仕事などで学校を休む子どもの親に、学校へ来させるよう伝えた記録。



(写真：『池田町懐かしのアルバム』より)

1 宗教を広める(しゅうきょうをひろめる)：「神仏分離」など明治政府の国家神道推進をきっかけとした迫害も、他の宗教が北海道で布教することへとつながったという。

土間にむしろをしいて ... 寺子屋のようす

小林マサオさん〔女性〕の寺子屋についての思い出です。
 「(小林さんの通った)この寺子屋は全くの草小屋で、池田農場にまねかれて明治三十一年(1898)に入地した野村慈教さんが、布教のかたわら始めたものです(真宗大谷派本願寺所属説教所の池田仮設学校で今の池田小学校のもとになった:左ページ写真)。

中は地面にヨシをしき、その上にむしろをしいただけのものでした。

座布団もなく、冬は寺子屋の中に火をたいて勉強してい

ました。寒くてかじかむ手をこすりながらの勉強でした。寺子屋での勉強は「ハト・マメ」の読本と手習いで、石板に書いては消し、書いては消して勉強しました。

先生の野村慈教という人はとてもきびしい人で、質問にまちがった返事をする、女の子でもほほを強くたたかれたり、つねられたりもしました。学校の先生はこわいものだと思つづく思つたものです。

冬の吹雪の日は寺子屋に通うのがつらくて、死ぬんでないかと思つたこともありました。」

(「池田町開拓夜話」より)

注:小林さんは165ページの高橋ゆうさんの娘

こおって足が入らないくつ ... 登下校も大変だった

「道路は馬車のわだちと馬の歩く道以外は草がのび、朝つゆにすそをぬらし、雨の日は泥にまみれての登校でした。

大雪の朝は馬そりで送ってもらい、下校の時は上級生が雪をふんで先頭を歩き、その足あとを下級生が歩いたものです」(堀井忠治さんの話)

「私は当時二年生で一学期まで先輩や姉に連れられて、開拓地の悪路往復十二kmを清見ヶ丘の池田小学校にかよったが、冬の吹雪や深い雪道は馬そりで送り迎えしてもらった。

今のようにゴム長ぐつもなく、防寒ぐつと称するズック(綿布製)のくつで、こおって固くなり足が入らない時、

姉にはかされて帰ってきたことがある。

様舞分教場の開校により通学は楽になり、雪の日は祖父が作ったわらぐつをはいた。わらは年に一、二度買う米俵をほどいて使った」(奥田実太郎さんの話)

「一日の授業が終わると二つの山を登って、我が家へと帰りました。一寸先も見えない原始林、大木の立木、昼でさえキツネやウサギがわが物顔に出て歩いていた時代でした」

(平井トメさんの話)

(東台小学校開校記念誌『東台の灯は消えず』・

様舞小学校開校記念誌『鑽仰』=「池田町開拓夜話」より)

十勝へ来る先生も大変だった ... 狩勝峠を馬そりでこえた

佐々木円太さんは、明治40年(1907)に利別尋常高等小学校の先生となりました。

師範学校(先生になる学校)は札幌にありました。佐々木さんは3月30日に列車に乗り、旭川経由で落合(南富良野町)までやってきます。当時はここで、線路が終わって

いました。一泊したあと、佐々木さんは仲間3人で馬そりをたのみ、狩勝峠をこえます。峠はまだ雪が深く、下り坂でそりがひっくり返り、20mくらい雪まみれになって転がりました。

ようやくふもとの新得に着いたら、今度は雪どけ道です。馬そりは苦労しながらペケレベツ駅(清水町)まで着き、ここで一泊しました。

ここから先は、もう馬そりが通れないということで、3

人は歩くことになります。

4月1日、泥にひざまでうまるような悪い道を、カシワの大樹林の中、とぼとぼと歩き続け、やっと夕方に芽室駅に到着しました。家が14~15軒あって、ようやくホツとしたといえます。

翌日、帯広に行き、河西支庁(今の十勝支庁)であいさつをして注意を受け、一泊します。そして、翌4月3日、汽車に乗って利別に到着しました。

(注:鉄道は明治38年〔1905〕に釧路・帯広間が開通、帯広・落合間は明治40年〔1907〕9月に開通: p184)

(佐々木円太さんの話を意識)

(『利別尋常小学校開校六十周年記念誌』

=「池田町開拓夜話」より)

2 むしろ(籬): わらなどを編んで作った敷物。
 3 手習い(てならい): 文字を書く練習。読み書きや勉強のことをいう場合もある。

4 石板・石盤(せきばん): 黒い石でできた板で、ろう石というチョークのような道具で文字を書くノートの一種。布でふけば消えるので何度も使えるが、記録はむずかしい。
 5 わだち(轍): 車輪のふみあと。